

教職一途に・一女教師の回想

小林 まさえ

先日、プール開きを前にして、地元の消防団員の方々において願って、ホースで、プールの内外を隈なく、清掃していただいた。子ども達を始め、職員一同の喜びは、一方ではなかった。清掃終了後、校長室で、いろいろと懇談を交した際、この方々は、戦後三十年の初期から中期を、少年として生き、今は子どもたちの父として家業を営み、社会のために貢献し、立派な壮年として活躍なさっている方々である。

戦後三十年を、このように逞しく生きてこられた方々、そしてまた、自分自身を振り返って見た時、拙いながら、その間一日も欠かさず、精いっぱい力で、教職に携わってきたことなどを考えてみれば、感無量である。

敗戦に打ちひしがれた日本国民、ましてやその頃の子どものたちの、惨めな生活振りを回想しながら、その頃の教育のこと、子どもの実態、風物詩などを書かせていただくことにして、それが基礎となり、現代の子どもたちがなんの苦勞もなく、教育を受けられる幸福を感謝しながら、こ

の稿を書かせていただこうと考えている。

終戦の翌年、私は高等科二年を担当した。教科書とは名みのみの、細字の活版刷りで、それはそれは貧しいしろ物であった。どんな文章であったか、今はさっぱり記憶にないが、教師にも、ましてや子どもたちには、興味などさらさらなかった文章であったような気がする。

二学期から、男女共学と制度が変わり、子どもたちは戸惑い、男の子と女の子のなごやかさは、葉にしたくもなかった。毎日が、男女の戦争であった。寒い教室は、その頃の状態であり、誰も彼も、それに堪えてきたが、終戦後という状態は、なにもかも、まともではなく、子どもたちまでもが、解放的となり、授業が始まって、男子たちは、教室の羽目板にへばりついて、日向ぼっこ、なかなか教室の中には入ってこなかった。

翌年は、一年生を担当したが、その時期が、一番物資が欠乏していた時代で、母親たちは、子どもの教育や行動よりも、「運動靴の配給は、いつ頃の予定ですか。」とか、何々は今なくて困っているから、ぜひ私の所へ配給してほしいとかいう声が、あちからこちからも、潮のように轟き渡っていた。

その年、国定教科書も変り、一年生の国語は、初めから、平仮名を用いることになった。入学前、片仮名を一生懸命習ってきた子どもたちは、くねくねした平仮名にはとっつき難く書けない書けないと、よく泣いた。教える私も、要領が解らず、随分と苦勞した。

その年の十一月から、浜中雄一校長先生、相原とき子先生、父母の方々のご尽力に依って、みそ汁だけの給食が開始された。その頃の給食の回想と、現在の給食の進む方向を、昭和五十年度の東京都給食研究会に掲載した私の小文を挿入してみよう。

「入学して、半年程を過ぎた一年生の子どもたちが、自宅から持ってきた汁椀、その中に入れてもらった汁の実を覗いている。その瞳は、何を見ている時よりも輝き光っているように見えた。

『いただきます。』

の声と共に、椀の中のソーセイジはまたたくまに、口の中に吸い込まれてしまう。この光景は、給食と銘打って、昭和二十二年、はじめて行われたD型一カ月五十円の我が校の給食であった。いうまでもなく、汁の中のソーセイジは、アメリカ出資の食品である。まだ食糧も思うように口には入らない子どもたちにとっては、給食こそ、最大の救いの神ではなかっただろうか。しかしこの頃の給食風景は、すべてが惨めなものであった。バラック造りの給食室の中で、釜といえば終戦時軍隊の残していったもので、それを物置きから引っぱり出して、地区のおかあさんたちが、交替で調理を担当した。副食の野菜、燃料の薪などは、農家へお願いして、供出していただいた。寒い雪の日でも、雨風の日でも、母親たちがリヤカーに積んで学校へ運んだ。その苦労は大変なもので、今でも道などで会うと、その当時の苦しさを話し出す母

親たちである。

それから八年後、現在の完全給食A型に移行し、一カ月二百四十円となり、パンにミルクが付くようになった。ミルクと言ってもその当時は、粉ミルクを溶いて、煮立てはするものの、子どもたちの器に届く頃には、食器の底に、ザラザラと粉が残っており、目をつむって飲み干していた子どもも多かった。

その頃の給食は、マナーも勿論であるが、日本がこの状態でいくと近い将来、米の減産が実現する。そうなると、米が思うように食べられなくなる。その場合はどうしても、パン食に頼らなければならないという持論であった。教師の中でも、なかなかパンになじめない人、ミルクを飲むと下痢をする人も出てきた。女の先生の中でも、このおかげで、ご飯のおかずで食べられたら、どんなにいいだろうと溜息をついている人もいた。

時代が流れ、時が移ると共に、設備の整った給食室が出来、給食は次第に定着してきた。それと同時に、最初の頃の待ち遠しさ、有難さも、児童の脳裏から消え去っていった。残菜も多く出てきて、給食主任を困惑させ、どうしたら、好き嫌いなく食べられるか、残す子の指導等に担任は頭を悩ました。

今では、給食も学級指導の中に取り入れられ、福生市も、給食主任と、給食センター関係者、栄養士等で話し合い、立派な指導計画も出来て、楽しい雰囲気ですぐに食事ができるという目標



修学旅行で記念撮影 (第1小学校時代)

否かを名文で書いてあったように記憶している。その事実もないのに、この文に対して、何の抗議もできなかった我々の不甲斐なさをつくづく嫌悪していた。終戦後とはいえ、その頃はまだ、教師が霞を喰って生活をするたえのように、なんの反撥もできなかった。しかし、旅行はいい経験であり、さすがに元氣過ぎる子どもたちも、遠く故郷を離れると、師を頼り友と言ひ争いもなく、当時の校長、浜中先生も、にこやかな笑を浮かべていたのを記憶している。無事に卒業式を迎え、卒業生代表が立派に答辞を述べた時は、目前がふわっとして自分自身がどこに立っているかわからないほどだった。

この学年の卒業後は、二、三、四と、三年間を担任した。二年生からの持上りは、私に

も、一つの主眼として進んできている。

来年度より、米飯給食が取り入れられるようになると聞いている。その可否はともかく、パンを国の主食とした最初の計画は、ここに崩れて、日本古来の米食が、また復活してくるということは、今後の児童の身体の発育その他に、どんな影響をもたらすことになるのであろうか。」

と結んでいる。現に五十二年の四月、カレーライスが献立の一駒を占領している。

この一年生を受持つて一番印象に残っているのはやはり給食の一語に尽きる。給食になるとにつこり笑った男の子の顔が今でも目にちらつく。

次の年は、五年、六年と二年間を受け持つ羽目になったのだが、この二年間の苦しさ、教師としての力の無さ、不甲斐なさを感じたのは、教師になって初めての経験であった。この子たちの昔の写真を見ると、なんと純心そのもので、あの苦労は嘘ではなかったのかと思議さを感じる。

その頃の修学旅行は、箱根と決まっていたが、この学年は、受持三人の話し合いで、修善寺に決定した。教師たちも行ったことのない修善寺であったので、心配もあったが、旅行案内人に任せることに安心したが、旅行に先き立ち、駅前に大々的の張紙が出て、この旅行についての悪口が、某氏の文面で載っていた。それには、教師がリベートを取って、遠くまで旅行させるか

なにか安心感を与えた。この時代に前後して、私が赴任以来一番盛大に学芸会や子ども会が行われた時期であった。二年の時には「長靴をはいた猫」を演じた。学芸会間近になって、主役の市川博行君が風邪で倒れ、家庭まで押しかけて行って、特訓した記憶もある。今考えると、随分無茶なことをしたものだと言汗が出る。

三年の時は、題は失念したが、水谷康子さんが主役で、露光る野で、機を織るバッタの物語りであった。私は、舞台の上に腹這いになって、露である豆電球をつけたり消したりして苦勞の絶頂を経験していた。

四年の時は、昆虫たちの友愛を描いた劇であったが、加藤文男先生の名監督で、市川、持田、小林君たちが舞台上に花を咲かせ、劇中歌がないと淋しいなどと、私の作詞作曲の迷音楽も加え、田村和枝さんが、美声を張り上げて歌い、学校代表で羽村小まで遠征した。なつかしい、なつかしい思い出である。

その頃はまた、地区の子ども会が、実に盛んであり、とくに、志茂の船木甚平さん、本八町会の徳永巖さんらはその会に魂を打ち込んでおられた。寒い夜など、青梅街道（今の銀座通り）をてくてくと歩いていくと、両側は桑畑となり、時々馬の糞なども落ちていて、今と比べものにならない寂しい道だった。新しい家の灯を頼りに、船木さんのお宅へも、何度か伺った記憶もある。そして、いろいろと会の運営や、子ども会の在り方についての懇談会など、夜の更けるのも忘れて話し合った。また役員は、ピクニックの候補地などを実地踏査してくださった。その頃は、思うように遠くへ遊びに行けなかった子どもたちに、十分の満足感を与えてくれた。

次の年は、また二年のふり出しへ。この頃から、児童数が急増して、二部授業を行うことになった。そのために、子どもたちの活躍した学芸会は、雨天体育室が、二つに区切られて教室になったので、涙を吞んで中止された。

二年生は、学年当初、先生が一名欠員で、私など午前午後ぶつ通して一組と三組を受持った。喉は枯れ、目は落ち窪み重労働であったが、文句一つ言わず頑張ったものであった。

その時代の子どもの遊びは、勇壮なものが多く、とくに男子は群を組んで遊んでいた。他地区、秋多の子どもたちと多摩河原で衝突するのも、この時代が最後ではなかったろうか。その頃の福生一小の榊田賢勝君（現福生四小教諭）にその時代の遊びの様子を、つぶさに書いていた。

榊 田 賢 勝

その頃の多摩川はきれいでした。永田橋は、木の橋で、それでも、橋桁は、円型のコンクリートで造られておりました。そのそばは、二、三米の深さはあったでしょう。とうてい小学校の

児童の背はたたなかつたのです。しかし、水底の石は、白や赤やみどりにはつきりと見えていました。

夏の遊びは、児童にとって、渡船場と言った、この永田橋下での水泳が、中心でした。

泳げる子も、泳げない子も、「いっちょ」と言つた黒いふんどしをしめ、「めがね」と「もり」を持つて永田橋へ集まつたのです。

水泳のスタイルにも、不文律のようなものがあり、五つの型がありました。「ふるちん」（これは、めつたにありませんでした）「パンツ」「水泳パンツ」「いっちょ」そして、赤の「六尺」。あまり泳げないのに、「いっちょ」や「六尺」をしめると、「なまいきだ」と言われ、「水泳パンツ」だと、「きざだ」などと言われたものです。私のように泳げない者の最高のスタイルは、日常はいている「パンツ」だつたのです。そして、白いパンツをはいている者には、上級生たちもあまり無理なことをしませんでした。しかし、水泳は、だれもおしえてくれず、やはり、上級生のあらつぽい特訓を受けなければなりませんでした。だれが言つたのか、「泳ぐためには、多摩川の水の五・六ばいものめばいい」と言うことを、彼等は忠実に守つていたのです。背の立たない橋の下につれて行かれ、「ぽい」と、つきはなされるのです。とにかく手や足を、バタバタさせて、水がぶがぶのんでいううちに、下流の浅瀬に流れつき、生命をとりとめるのです。ふしぎなもので、それでも泳げるぞという自信がつくのです。もぐりでも、なんでも、とにかく

橋桁に行けるようになるわけです。そうなれば、しめたもの、上級生たちも、一人前にあつたてくれ、遊びは無限に広がっていくのです。

『石打ち』

泳ぎつかれると、今度は、魚取りです。「めがね」と「もり」を持って、浅瀬に行き、「かじっか」や「ハヤ」をもちで突きまわりますが、なれないともりでつくのは、なかなかむずかしいもののです。そこで、もっと浅く石のごろごろしている所に行き、頭ほどの石をひろい、やはり、そのぐらいの石に「ガツン」とぶつけるのです。石の下から、土の煙幕が出て、それがうすれる頃、石をどかすと、気を失つたハヤが、五・六匹浮き上がってくるのです。これは、一番手間のかからぬ魚取りでした。今では考えられぬことですが、それだけ多摩川の魚の数が豊富だつたのでしょう。

『水のみ場』

いかにきれいな多摩川の水とて、飲むわけにはいかなかったのです。そこで、のどがかわくと、日のじりじり照りつける中を、永田橋を渡り、『豊坂』の登り口まで行くのです。そこには、清水が道のほうまで飛び散るほど湧き出していたのです。石垣に片足をのせ、なまいきなかつこうをして、腹一ぱいに水を飲んだものです。石垣には「さわがに」がいて、それをついでに二・三匹つかまえて帰つたものでした。

夏の終りには、男の子の顔は、まっ黒に日やけて背中、皮もきれいに一かわむけて、それは健康そのものでした。

『石けり』

これには、二種類か三種類あったと思いますが、重ねもちのように、半円を一つ、二つ、一つ二つと全部で十二・三つなぎ、番号じゅんに石を入れ、手前の半円で片足のまま自分の入れた石を手でひろい、チョンパタ、チョンパタと声のリズムで飛んで行くものでした。もう一つは、長方形のような図形を書き、はじめに大またで、何歩で渡るかをきめ、一歩で石のふめる位置に石をなげ、反対側のわくにけり入れて、残りの歩数でその場所に行き、最初にきめられた歩数で帰るという遊びです。前者は「ちょんばた」といつていましたが、後者は何んと言つていたのか、忘れましたが、とにかく、男の子も、女の子も、同じ立場で遊べるゲームの一つでした。他に遊ぶ道具のあまりない時代でしたので、だんだん夢中になると、「線をふんだ」とか、「線の上だ」とか、言い合いのけんかをしたものでした。グループでやるゲームでしたので、ひとりが失敗しても仲間のだれかが成功すれば、つぎ二歩へとすすめるわけで、仲間同志のたすけ合いは、すばらしいものがあつたわけです。

『トラックのトン数当て』

道もせまく、ほそうされていない道路が多かったのですが、ジャリをはこぶトラックなどが、けっこう多く走っていたのです。あまり多数の遊びなかが集まらない時には、道端の石に腰をおろして、次にくるトラックはどこ会社の何トン車だ、などと、予想して待っているのです。そして予想が当たると、「いっちょうばかすいない」などといつていばつたものでした。この「いっちょうばかすいない」とは、どんな意味かよくわかりませんが、「やつたぜ」という意味があつたのでしょうか。なにかあると、「いっちょうばかすいない」と言つて、得意がつたものでした。しかし、ふしぎと、トラックのトン数と、会社名が当るのです。もっとも、トラックは、四トン車と七トン車ぐらいのものでしたし、トラックの会社も限られていたものですから、まぐれでもあたることは、あたるわけです。でも、気の長い話で、トラックがこなければ、くるまでしんぼう強くまっていたわけです。

同じように、その頃青梅線には、奥多摩から石灰岩を運んでくる貨車が、ずいぶんと通つたものですから、何りょう編成かを当てたり、貨車の種類を「トラだ」「トキだ」などと当てたりして遊んだこともあります。今の子どもたちから見れば、何んとひまなのんびりしている遊びだな、と思われることでしょう。

今も二十数年前も、遊びの種類に、あまり変化はないと思います。いやむしろ今の方が、遊びの種類は多いと思います。しかし、遊び方に大きなちがいがあつたと思います。それは、どんな遊びにも、ともしんけんだったと言うことです。自分の気に入らないことがあつても、その仲

間といっしょにいて、その遊びを皆と同じ気持ちでやらなければ、もう、別の遊びはなかったからです。ひとりでやれるゲームなんて、だれひとり持ちあわせていなかったのです。それだけに、一つの遊びを大切にして、次々と遊びの種類を変えるようなことはしませんでした。

遊ぶ道具もそうでした。お金を出して買ったものは、それは宝石でも扱うように、皆が大切にしたのでした。こわれたからと言って、すぐに買いかえるほどのお金持ちの子は、いなかったのです。こわれたら、修理して使いましたし、だいたい手造りのものでまにあわせたのです。

反面、だれもが持っていない道具を持っている人は、神様のように大切にもされました。

今の子とちがうと言えば、そんなことかもしれません。物が豊富になり、子供がお金持ちになると、ひとりで遊ぶし、自分の気にいらぬことはしなくても、さびしくないだけの道具は、買いそろえられる。自然、仲間意識はなくなり、自我の強い子が多くなるということにもつながるでしょう。働くことをいやがり、自分で創造した遊びはできず、できあがった物で遊ばされ、ふりまわされている子供たち。お金は、親からもらうものと思ひこんでいる子供たちに、私たちおとなは、何を与えて行ったらいいのでしょうか。

世の中の構造が変わり、何もかも便利になってきた今、遊ぶ子供たちは、私たちに重大な警告をしてくれています。物にふりまわされるな、物にふりまわされると、大切な心の発展がなくなるぞと。

一見ばかげた、気の長い遊びが、なつかしく思えてきました。

* * *

現代の子どもの遊びっぷりとは、かなり異った面がある。

この子どもたちが三年生の時、第三小学校が設立され、組分けをし、一抹の寂しさを味わった。

この組が五年生を修了する時、いよいよ児童数が増えて、加美へ分校が設立されることになった。分校と言っても当時の五年と三年が全員分校通学ということになった。本一・本二・本七・本八の高台の上の方からの通学は、随分体に応えたと思うが、学校が新しいので満足していた。

分校の所在地は、長沢の神社から先は、道がみつからないほどの、草ぼこ道を通って行くと、本の一軒屋の森田七郎さんの家があった。その家の横道を通っていくと、砂利線に行き当たる。その向うの一面の桑畑が、分校の地として発足したのであった。その当時は、どこから入っているのか、初めての人は随分と戸惑ったものだった。

私は、六年を卒業させるまでは、第一小に勤務していたかったが、やむを得ず分校に移って、三年生を受持った。前の第一小の藤谷重三郎校長先生が分校の主事として青梅から赴任なされ、総勢九名の先生が毎日楽しく指導に当たった。運動会には三年生が、加美のおみこし競争を出し物にし、加藤哲郎先生が総指揮をとった。厳しいことは、学年ごとに主事先生が、国・算の総合

弁当も食べ終って所在なくなると、申し合わせたように、仏舎利の殿堂の下に集まる。芝生に寝ころがって角力を取り、鬼ごっこをし、思う存分の声を張り上げる。時々山鳩や鳥の羽音が聞こえるが、子どもたちの勢力に押されて逃げてしまう。

「ちぢいばあねてろ。よめは起きて茶わかせ。」などと歌いながら摘んだものだが、もうこの頃はそんな歌は誰かが聞き知っていなかった。尾根近くには、背の低い枝だけつんつん出ている木がある。その枝が春の声を聞く頃は、真赤な燃えるような色になる。みんな赤ん坊の木と呼んでいた。子どもたちはその枝を、二、三本折っては腰に下げて遊ぶ。

雑木の根本に細い暗緑色の葉群を見つけ、その葉の間から淡緑色の苞に包まれたつんとした花らしきものを見つけて驚きもする。私の子どもの頃は、よくこの春蘭掘りに行ったものだ。春蘭などとそんな学名は知らなかったが

遊んでいた子どもたちが、三々五々、おにぎりやパンの弁当を、大きな紙袋に入れて、多摩川の浅瀬伝いに対岸へ渡って行く。そして、丘陵の中でも、十二支天と名のつく小高い頂上へ集まる。そこでは半日ぐらい遊ぶ材料がころがっている。まず探検ごっこだ。細い径を下って行って、そこに、子どもひとり入れる穴でも見つけたら上等、自分たちが一端の探検家になったつもりではしゃぐ。

細谷勇太郎校長を主軸として総勢十七名。四月十日、皇太子殿下・美智子妃殿下のご成婚式の日にあやかって開校式が行われた。

その頃は、まだまだ交通も寂しく、子どもたちは道路を自由に闊歩できた。遊びも、遠くの地へ平気で行けるような状態であったので、よく遠出をしていた。

『春と名のつく三月から四月初めにかけての休日。冬の間は、近所の庭や車の通らぬ小道で



第4小学校校庭にて

テストの問題を作製して学級に配った。

学級の担任は、その成果を話し合い、ひとりでも落ちこぼれないように、児童の育成に心掛けた。

次の年は、五年生だけ五組。なんか、中途半端な感じがしないでもなかった。子どもたちは、下級生も上級生もないこの学校に、満ち足りない感情をいだいているのか、気持が複雑だった。とくに私の学級など、突拍子もないことをしかして、教師などを困らせた。しかし知能の発達した子どもが多く、授業をしていても、いつもきびきびしていて気持ちがよかった。

帰りは、折立部落のがけつづちを、川の方へ下りる。その一部分は、カタクリの生息地である。三月の下旬ともなると、うす紫の花が一面に咲き出す。花の可憐さに似合わず、斑点を付けた葉は、幾分グロテスクなところがある。子どもたちは、花の美しさに気をとられ、指の先を真赤にして根を掘ろうとするが、石間の中に咲いているカタクリは抜ければこそ、あきらめて花だけ摘めば川を渡る頃には萎れてしまつて、子どもたちは泣きべそをかく。』（ぬかご誌に掲載したその頃の一小文）

夏はまだ多摩川が清流で、泳ぎに、魚釣りに、日の暮れるのも忘れる。私も、子どもと一緒に、あんま釣りをしていると、小学生が

「おばちゃん 釣れる」という。

ひょいと顔を上げて見ると、第一小の児童。ああもう第一小にも、すっかり忘れられると同時に、まったく四小の先生になつて自分の発見して、世の移り変わりのげしさを感した。

早いもので、福生四小にも十六年余を勤務し、年を経る糸の乱れの苦しさに、を感じる年頃になつたことをつくづくと感じる。しかし年月は矢のように走り去つても、子どもたちの純真な瞳は、この世の続く限り消えないことであろう。

このような聖職にたずさわつて生涯を送れる私は、なんと幸福な人生であるのだらう、と思うと同時に、福生の子どもたちに、実になるようなことをなにもしてあげられなかった自分の腑甲

斐なさをお詫びして、この筆を置く。

（福生第四小学校教諭）